

誰彼を傷つけることもできるけど鉛筆のみを削る肥後守 佐佐木定綱

肥後守はたぶんいろいろ我慢していることがあるのだ。一首は、そんな肥後守への共感。これを書くためにちよつと調べてみたら、子供のころからなじんでいる「肥後守」は商標登録されている商品名なのだという。考えたこともなかったし、はじめて知った。

事務員の屈託のない微笑みに二せうつ病の女が怯む 松岡秀明

精神科に来院した女性を、精神科の医師の立場でうたった一首。多様な人が患者として来院するのだろうか。二七病かどうか疑ってかかる医師には平気でも、事務員には怯おそんでしまうのだという。精神科の病気および病状の複雑さが推測される。

一枚の紙の力で人は飛ぶ フライトチケット、人事 発令 笹本碧

「一枚の紙の力で人は飛ぶ」という謎めいたフレーズが魅力的。下句を読めば、「一枚の紙」は航空券であり、転勤の辞令だということがわかるから、読者が下句を読むまでのほんの0・01秒よりもっと短い時間の謎だが、謎は謎だ。

金目鯛・鯛・鱈・鮪まぐろ揃うよろこび新年迎う

今泉敏雄

五種類の海の魚が揃ったのだという。新年の祝い膳だろう。たぶんみな刺身になっているのだと思う。一首に

短歌の現在

No.432 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

四種の鳥をうたいこんだ若山牧水の歌があるが、この歌には五種の魚の名前が入っている。固有名詞を並べる歌では、山上憶良の秋の七草の歌が有名だが、あれは旋頭歌型式。短歌型式で五種類もの固有名詞が入っている作はきわめて珍しい。

人死ねば弔歌したたむる習いにて島人おのずと歌に つながる 吉原三保子

短歌が社会的に重要な役割を江戸時代から保ってきた種子島。その役割にあらためて光を当てた種子島在住の作者の一首である。谷川健一・古橋信孝氏ら、何人かの研究者の書いたもので、種子島の人たちのあいだに江戸時代以来生きてきた短歌について読んだことがある。不思議な風習だ。

タケミツの縁取りの無き音流る風の流れに寄り添う ように 鈴木勉

武満徹の曲を「縁取りの無き音」と表現した手柄が一首の核心。どんな場所で、どんな曲を聴いたのか、細部をいさぎよく省略している点にも注目したい。

月一輪凍湖一輪響き合ひまじづかに鳴る冬の音楽 山口明子

岩手県の冬を題材に、一首中の音のひびきで勝負した作。何度もじっさいにこの歌を発音してみると、意味内容には束縛されない、言葉のひびきのよさがわかる。

コンコースの人波に追い越されつつ私は誰とも繋がっていない 片山紫